

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻
日本・東アジア文化学領域
彭 腊梅

【論文題目】
中国中世の妓女と文学—蘇小々に関連する詩歌を中心に

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

彭氏の学位論文「中国中世の妓女と文学—蘇小々に関連する詩歌を中心に」は、伝説の妓女蘇小小に関連する六朝から宋代迄を中心とする文学作品の考察を通して、中国の文人と妓女の社会的・文化的な関係、またその交流から生まれる文学の在り方について明らかにすることを目的としている。

第一章では考察の前段階として、六朝文人の蘇小小に限らない妓女全般に対する態度の変遷についてまとめている。その結果、劉宋以降の詠妓詩では歌舞の美しさだけではなく、妓女を感情ある一人の人間として描く傾向があることを指摘している。そしてその理由として、文学創作の集団化・遊戯化、また宴会の世俗化・享樂化により、詩作が個人の私的な営為から仲間同士で応酬し合う社交的な活動となったことで宴席に侍る妓女も詩題となり得たということ、そして当時流行していた楽府民歌が男女の情愛を詠うものであったことの二点を指摘している。

第二章では蘇小小に焦点を絞り、彼女の名前が最初に登場する六朝の「錢塘蘇小歌」から唐詩に至るまで変遷を辿っている。その結果、「錢塘蘇小歌」では自ら積極的に永遠の愛を追い求める独立した女性という、当時としては斬新な女性像が打ち出されていること、そしてそれが唐代になると、「錢塘蘇小歌」に端を発する「恋する女性」というイメージに加えて、新たに杭州西湖の妓女を象徴する代名詞的存在というイメージも生まれてきたことを指摘し、そこには唐代における文人と妓女の関係の変化が反映されている可能性を述べている。

第三章では第二章の考察の背景について、唐代の社会や文化との関連から論じている。蘇小小が著名になった理由について、従来の研究では中唐以降文人達の江南民歌や六朝詩への関心の急激な高まりが指摘されているが、彭氏はその要因として安史の乱以降の政治社会状況の変化を指摘している。氏は更に、唐代における歌曲創作の流行、酒宴の日常化、文化的教養を備えた妓女の出現といった事柄が複合的に作用することで、蘇小小は江南の文化的教養を備えた妓女の代名詞として様々な文人の詩文に使用され、また逆に使用されることによって更にその名を高めていったと論じている。

第四章では、唐代に続く宋代の文学に於ける蘇小小のイメージの受容と継承について論じている。その結果、宋代の文人は唐代の蘇小小のイメージを継承するだけではなく、文人自身が思いを寄せる対象として詠うようになっていくこと、また更に隠遁の伴としても詠われるようになっていくことを指摘し、その理由として、宋代に於ける商業経済の発展による妓女の社会的地位の下降、及び隠遁の理想地として西湖が注目されるようになったことを論じている。

今後更に考察を深める必要のある課題も残されてはいるが、従来の妓女研究は総論的なものが多かったのに対し、彭氏は蘇小小が多くの文学作品に登場する著名な妓女でありながらも実在に疑問符の付く存在であるという点に着目し、むしろ実体性の薄い存在であるからこそ、それぞれの時代の文人達の妓女観を象徴的に反映していると考えている点は独創性があると言える。本研究は今後の妓女文化研究に大きく寄与し、その新たな基礎ともなり得るものであると判断できる。よって本論文は博士（文学）の学位に相応しいものと認められる。

【最終試験の結果の要旨】

平成 25 年 1 月 10 日（木）午後 2 時から午後 3 時の間、文学部小会議室に於いて審査委員 5 名参加の下に最終口頭試験を実施した。最初に彭氏が論文の概要について説明し、引き続いて各審査委員による質疑応答が行われた。彭氏はこれらについて適切に応答した。

また平成 25 年 1 月 27 日（日）午後 3 時から午後 4 時の間、E205 教室に於いて学位論文公開発表会が開催された。参加者からは、蘇小小が数多い妓女達の中で特に注目された理由、また中国文化の中での妓女の位置づけやその文化的意義などについての質問があり、彭氏はこれらについても適切に回答した。

以上により本審査委員会は、申請論文が学位を授与するに足るものであり、かつ十分な研究能力を持っていることを確認し、最終試験を合格であると判断した。

【審査委員会】

主査 屋敷 信晴
委員 吉川 榮一
委員 朴 美子
委員 森 正人
委員 福澤 清